

京都における地蔵菩薩信仰をめぐつて

—「伝統の創造」に関する一事例—

田中悠文

◎はじめに

京都における地蔵菩薩信仰をめぐつて

1. 矢取地蔵やとりぢざう——(南区九条羅城門町四ツ塚、地蔵堂。石像坐像、長五尺余。錫杖と宝珠をもつ。)
2. 釘拔くぎぬき——(上京区千本通上立売上ル花車町東側、石像寺。石像、立像。)
3. 地獄ぢごく——(中京区寺町三条上ル天性寺前町東側、矢田山金剛寺。木像、立像。火炎中に立ち、与願印。)
4. 延命えんめい——(山科区御陵平林町、吉祥山宝塔院安祥寺地蔵堂。木像、坐像、等身。彩色、錫杖と宝珠。)
5. 星見ほしみ——(上京区御前通一条下ル、北野万松山西雲寺。木像、立像。左上方を見上げ、右錫杖、左与願印、二童子を連れる。)
6. 崇徳すどく——(左京区聖護院中町、積善院準提堂。石像、坐像。別名、「人喰い地蔵」。錫杖と宝珠。)
7. 足拔あしぬき——(上京区大宮寺之内東入ル、妙蓮寺前町。石像、坐像。定印の上に宝珠。)

8. 桶取おけとり——(左京区静海市原町七三八—一、森豊山更雀寺。尊容、不明。)
9. 鎌倉かまくら——(左京区浄土寺真如町黒谷、鈴声山真正極楽寺地藏堂。石像、等身大。同右。)
10. 世継よつぎ——(下京区富小路通五条下ル、塩釜山上徳寺地藏堂。同右。)
11. 子安こやす——(右京区西大路四条北東角、日照山高山寺。同右。)
12. 身代みがわり——(中京区壬生天池町、尼ヶ池福田寺。石像、坐像。同右。)
13. お首くび——(北区北野東紅梅町、地藏堂。石像、立像。錫杖と宝珠をもつ。※現在、錫杖は行方不明。)
14. 菌形はがた——(北区紫野十二坊町、千本通鞍馬口上ル東側、地藏堂。石像、坐像。)
15. 鍬形くわがた——(北区大將軍川端町、一条通紙屋川西入ル、椿寺地藏院地藏堂。立像、錫杖と宝珠をもつ。)
16. 輪形わがた——(下京区東洞院通塩小路下ル東入ル、正行院。石像、立像、長三尺余。錫杖と宝珠をもつ。)
17. 金焼かなやき——(下京区朱雀裏畑町、旧、千本七条通。朱雀權現堂(權現寺)。金銅像、三寸弱の坐像。右杖(錫杖)と左宝珠。)
18. 洗あらい——(東山区大黒町通松原下ル西側、寿延寺。石像、立像。三尺余。二手合掌。)
19. 泥足どろあし——(中京区六角通大宮西入ル、善想寺門前。木像、一尺三寸余の坐像。)
20. 屋根葺やねぶき——(中京区坊城通新徳寺。旧、六角猪熊星光寺本尊。古像は石像、坐像、等身大。今の像は一尺余の木像、坐像。延命地藏型、錫杖と宝珠。)
21. 繩目なわめ——(中京区壬生柳ノ宮町、宝幢三昧院壬生寺本尊。長三尺余、木像、坐像。延命地藏。錫杖と宝珠。)
22. 協かなえ——(右京区花園扇野町、法金剛院。丈六、木像、坐像。錫杖と宝珠をもつ。)
23. 鬘懸かづらかけ——(東山区輓轡町、普陀洛山六波羅蜜寺。木像、立像。かづらをもつ。)

京都における地藏菩薩信仰をめぐる

- 24 川崎かわさき——（上京区一観音町、川崎山清和院。木像、立像。錫杖と宝珠をもつ。）
- 25 天神同體てんじんどうたい——（北区紫野十二坊町、上品蓮台寺。木像、坐像。尊容、不明。）
- 26 染殿ぞめどの——（中京区中之町、四条新京極通上ル西入ル、十住心院（染殿地藏院）。長七尺余、木像、立像。秘仏。）
- 27 腹帯はらおび——（⑦西京区大原野小塩町、小塩山十輪寺。染殿皇后ゆかりの尊像。①伏見区醍醐南里町、善願寺（旧、浄福寺）。尊容、不明。）
- 28 目疾めやみ——（東山区四条大和路東入ル南側、仲源寺。木像、丈六坐像。玉眼入り、錫杖と宝珠をもつ。）
- 29 米野よねの——（東山区粟田口三条坊町、三条白川町、尊勝院。（東三条金藏寺御猿堂）一名、「米地藏」。）
- 30 獅子しし——（東山区本町四丁目大仏前北側、專定寺。尊容、不明。）
- 31 鯉こい——（中京区東側町、新京極蛸薬師上ル東側、妙心寺内。木像二尺余、立像。錫杖と宝珠をもつ。）
- 32 勝軍しょうぐん——（⑦左京区北白川瓜生山町の丸山、勝軍地藏堂。木像二尺余、坐像。錫杖と宝珠をもつ。①下京区朱雀裏畑町、朱雀権現堂（権現寺）。木像、立像。劍と旗をもつ。②上京区玄蕃町、飛行院西林寺。木像、二尺余、立像。尊容、不明。）
- 33 来迎らいこう——（もと下京区御影堂町、現、滋賀県長浜市、新善光寺御影堂。同右。）
- 34 乙子おとこ——（右京区常盤馬塚町、源光寺常盤地藏堂。木像、立像。錫杖と宝珠をもつ。）
- 35 六地藏むくぢざう——（伏見区桃山町遠山、六地藏大善寺。木像、坐像。錫杖と宝珠をもつ。）
- 36 四宮しのみや——（山科区四ノ宮泉水町、四ノ宮徳林庵山科地藏堂。同右。）
- 37 鳥羽とば——（南区上鳥羽岩ノ本町、浄善寺地藏堂。同右。）
- 38 桂かつら——（西京区桂春日町、桂地藏堂。同右。）

- 39 跡追ひあとおいの —
- 40 油掛あぶらかけの — ⑳ 雨止みの (28. の異名)
- 41 池の —
- 42 馬止めの —
- 43 餌飼えかひの — ㉔ 乙子 —
- 44 親恋ひの — ㉓ 山おくりの — (23. の異名) ㉒ 協の — ㉑ 鯉 — ㉐ 獅子の —
- 45 袖留そでどめ — ㉒ 將軍 — (32. ア)
- 46 田植たまえゑ — ㉑ 染殿 —
- 47 玉章たますざ —
- 48 峠とぎわの — ㉑ 常盤の — (34. の異名) 27. 腹帯 —
- 49 火消ひけし —
- 50 火伏ひふせ — (34. 35. 36. 37. 38.) 廻めぐり — (上記、34. 38. の異名)
- 51 木槿むくげ —
- 52 不焼やけぬ —
- 53 夢見ゆめみの — ㉑ 米野 — (29. の異名)
- は、異名・重複分である。』
- 〔*以上の内、39、㉒の27例は、安永九(一七八〇)年刊、秋里籬島作『都名所図会』全六冊・天明七(一七八七)年刊、同作『拾遺都名所図会』全五冊(市古・鈴木校訂、ちくま学芸文庫『新訂 都名所図会』本、全五卷)所収分。○数字は、既紹介分と重複。〕

●右に列挙した53例（重複分を除くと44例）に及ぶ異名をもつ地藏菩薩（以下、「地藏尊」）は、江戸時代には京都市内外（洛中洛外）にまつられていた。各々に冠かむされた異名は、靈験譚れいげんたん（1. 3. 4. 7. 8. 10. 21. 23. 27. 33. 39. 40. 42. 46. 49. 50. 52. 53.）、人名（6. 26. 34.）、地名（9. 24. 36. 38. 41. 48. 34.）、尊容（5. 17. 47.）、その他（34. 38.）から取材されている。圧倒的に靈験譚が多い。

●各尊像の作者は、弘法大師（2. 22. 26.）、満米上人まんまいじん（3.）、小野篁たかむら（30. 34. 38.）、慶俊僧都けいしゅん（51.）、玉依御前たまよみ（5.）、仏師定朝じようちよう（21. 28. 47. 49.）、恵心僧都えしん（11. 52.）、聖徳太子（32. ①）などであると伝えられている（『都名所図会』・『拾遺——』）。

伝弘法大師作の尊像の全てを真作、あるいは仮託であると即座に断定することは難むづかしい。ただし、4. の延命地藏は、開基の恵運律師えうんの唐よりの請来仏であるとの鑑札が下附されている。また洛西太秦廣隆寺に伝来する三体の内、「埋木地藏うゑぎ」（木像、立像。右与願印、左宝珠をもつ。）、および講堂の三尊の向って右の地藏菩薩（一木彫、坐像。右与願印、左宝珠をもつ。）は、弘仁（講堂像）・貞観（埋木）様式を示しており、いずれも大師の直弟の道昌どうしやう僧都（秦氏。讃岐の人。承和三（八三六）年、広隆寺別当補任。延暦十七（七九八）貞観十七（八七五）年。）の関与が指摘されている（『広隆寺』、広隆寺発行、他）。加えて、神護寺の五大虚空蔵菩薩坐像、東寺の八幡三神坐像、同講堂の諸尊など、大師在世中の造頭とされる古仏像等が多数存在するところから、京都に大師当時の尊像が遺存していたとしても、別段おどろくにはおよばない。この他、六地藏信仰と関連づけられた篁ゆかりの尊像（他にも洛西の化野福生寺旧蔵の木像二尺の立像や、洛南の木津誓願寺の木像二尺の坐像などが遺存。）、篁が師事したとする満米（満慶）の作（他に化野念仏寺の地藏尊がある。）、篁の地獄往來ゆかりの六道珍皇寺開基の慶俊の作、そして『往生要集』によって、それまでの地獄の印象が一変し

たとされる恵心僧都の作とされるものがあることは、京都における地藏尊信仰を考える上で興味深い。

以上の様に多様な伝承をもつ京都の地藏尊であるが、その尊容は既調査分（実地検分、写本版確認）の29例（1. 3. 7. 12. 24. 28. 31. 32. ㉗①、34. 38.）の中の21例（1. 4. 6. 13. 15. 17. 20. 24. 28. 31. 32. ㉗、34. 38.）が錫杖をもつ。内、錫杖のほかに宝珠をもつのは19例（1. 4. 6. 13. 15. 17. 20. 22. 24. 28. 31. 32. ㉗、34. 38.）。最古の遺例は、4. 安祥寺伝来の請来仏である。この尊容で、坐像の片足を垂下した場合、これを「延命地藏様」とよぶ（佐和隆研『仏像図典』、吉川弘文館刊）。

●さて、京都では、八月の盂蘭盆会の直前になると、慶俊や篁にゆかりの珍皇寺に詣でる「六道参り」で、「迎い鐘」について祖先の精霊を各家々に迎える。そして、お盆の最終日には、今度は満米と篁に由来する矢田山金剛寺に参り、「送り鐘」について祖先の精霊を送り出す。その総仕上げとされるのが、「五山の送り火」である。さらに八月二十四日はさむ前後に、街の辻々にある地藏尊をまつる「地藏盆」が賑かにつとめられる。また同時期には、京都の六ヶ所に配された六地藏を巡拝する「廻地藏」（または、「六地藏めぐり」）の慣わしが盛大に行われている。これらの行事は、主として祖先の追善、近親者の厄除や後生菩提のためにつとめられている。

一方、子宝や安産、さらには子育てのためには、「延命地藏」（4.）、「世継」（10.）や「子安」（11.）、「川崎」（24.）、「染殿」（26.）、「腹帯」（27.）などの異名をもつ地藏尊が、古来から篤い信仰を集めている。特に4. 24. 26. 27. は（清和帝の先帝の文徳帝の皇妃・順子の御願）、いずれも清和天皇の誕生に由緒づけられる尊像とされ、各々染殿皇后（藤原明子）の深い信仰の逸話が伝えられている。26. などでは、戌の日に安産祈願の岩田帯を受ける人で活気を帯びている。

●本稿では、上述した様な京都という地域における地藏尊信仰を取り上げ、庶民がそこに何を期待したかを確認し、そして現在見られる様々な風習が生活と一体化した軌跡を検討することで、現智山伝法院の模索する「伝統の創造」について考証してゆく。

◎ 第一節 地藏尊の靈驗譚

●ここでは、前掲の諸例から、大師ゆかりの「矢取地藏（一名、「矢負―）」（1）、篁と満米に関わる「地獄―」（3）と「六地藏」（34、38）、子宝・安産については「子安―」（11）、信者を実際に助けた「覺懸け―」（23）の5例の靈驗譚を紹介する。（*引用文は筆者が訓読し、適宜、改行等を施した。）

①「矢取―」（1。――貞享元（一六八四）年刊、黒川道祐作『雍州府志』第五―紀伊郡之條より。）

「―地藏堂。東寺の西南隅。山崎道の傍に在り（也）。

相い伝う。守敏、はなはだ弘法大師を妬み、わずかに其の出るを敵て、矢をもってこれを射る。その時、この地藏、その間に出現し、弘法に代りてその矢を負えり。今にいたるまで、地藏の木像に瘢痕あり。故に矢負い地藏と号す。―」

*この逸話は、東寺の大師と西寺の守敏僧都が、天長元（八二四）年二月の大旱魃に際して、請雨の修法の効験を争ったという説話に付随している。この修法合戦の話は平安末期頃に宇治大納言隆国によって編まれたとも云われる『今昔物語集』の内、「本朝仏法部」上巻、所収の「弘法大師、修円僧都に挑みたる語」第四十に類似的の説話が存在するをはじめとし、永和四（一三七八）年頃に成立した東寺蔵『弘法大師行状絵』巻八・第四段の「神泉祈雨」の詞書（全十二巻。二〇〇〇年、東寺宝物館発行『弘法大師行状絵巻の世界』所収）にも認められるが、事実、大師は祈雨の賞によって淳和天皇から少僧都に補任されていたので、請雨それ自体は史実と認められる（大師上表『辞少僧都表』――『精霊集』巻四、所収）。ところが守敏については確たる史

料に乏しく、その歴史上の実像は判然としない。一説によれば、弘仁十三年、興福寺別当に補任されたとも云う（経範作『行状集記』）。

京都の長谷宝秀和尚編の『弘法大師行状絵詞伝』（全一卷。昭和九（一九三四）年、六大新報社刊）によれば、「大師守敏互相調伏譚」は、経範作『大師行状集記』（二巻。寛治三（一〇八九）年。『弘法大師伝全集』巻一所収）をはじめ、兼意作『弘法大師御伝』（久安元（一一四五）年）。同前、巻一所収）など、多くの伝記類に収められるが、「矢取」の因縁譚はどこにも見られないとする。そして作者不詳『神泉苑縁起絵巻物』（寺伝では室町時代成立）の両師調伏合戦における、大威徳（大師）と軍荼利（守敏）の二尊が放った霊的な流鏑矢が空中ではち合せして落下する様子を釈して、「矢取地蔵の伝説は、これより一転したるものと思われる。」と結論づけている（以上、『一絵詞伝』巻下、第四幅―五 矢取地蔵―釈文）。さらに「けだし守敏僧都は常の凡夫僧でなく、得法の聖者であります。実にその内証をたずぬる時、大師の高徳を顕わし、真言の法門を顕揚せんがために、権りに怨敵の相を現ぜられたのであります。地蔵菩薩の現われて、両大徳を共に救い給えるも全くこれがためと思われます。」（『一絵詞伝』巻上、第四幅―五 矢取地蔵―PI77011~PI1863）として、この靈験譚の帰結を示す。（ちなみに現存する「矢取」は、木像ではない。）

②「地獄―」（3.―延徳三（一四九二）年、榮舜写、東寺観智院蔵『地蔵菩薩靈験絵詞』巻中、所収「一満米上人依地藏信敬力闍王授菩薩戒事」。（原漢文、筆者訓読。）真鍋広濟著『地蔵菩薩の研究』収録。）

⑦「延暦の候、満米上人と云う人有り。大和矢田寺に住す。此の山に在つては廿余年の星霜を送る。功を入れ奉りて小野ノ篁と師檀の契をなす。野相公、身は本朝に有りと見えども通つて修せらるべきの由を申す。闍王、菩薩戒を授くべし」との玉う。

その時、篁申して云う。（矢田の和尚を囑請して戒師とさせらるべし）と。即ち冥官を遣わして矢田の上人を請せらる。た

ちまちに師子の床に登って菩薩戒を授け玉えり。しかれば則ち、王宮の悪、息みぬ。王臣ともに喜ぶ。

王曰く。(地獄を見んと念い玉うや)。

上人曰く。(生死の苦を厭んがため、地獄を見んと欲う)と申し玉う。王、上人を伴いて阿鼻大城に往き玉う。獄門を開かむるに、鉄網四方に廻り、たとい那羅延が勢力も摧くべからず。猛火天壤をさしはさみて、劫盡の火災も消すべからず。天にそびえたる猛火の中に受苦の衆生に交つて僧まします。炎にしたがって上下す。

上人、琰王に問い奉つらる。(この僧は誰れぞや)。

王の曰く。(地蔵菩薩にておわします。地獄の衆生の苦を抜きたまうなり)と答えたまう。

時に菩薩、上人に告げて曰く。(王宮において菩薩戒を訖んぬ。故に地獄の衆生、多く苦を離る。吾、深く随喜す。釈尊の附嘱をうけて苦の衆生をすくう。常に火災の中に在りて苦に代る。しかりといえども、一毛ばかりの縁無ければ済度するに力なし。汝、人間に返りて悪道の苦を恐れる者は、我に縁を結ぶべしと広く諸人に示すべし)との玉えり。

琰王、上人を送つて柴にて塗れる小箱一口与え給う。開きて見るに白米を入れ玉えり。すなわち冥官を以つて上人を送り玉う。

上人、人間に帰つてこの箱の白米を取り用いるに、つきること無し。これに依つて時の人、満米上人と云う。

上人、巧匠に誹えて彼等の等身の地蔵の形像を造り奉るに、見奉りしに少しも違つところ有れば、幾度も直し奉られ、その後、この尊像を当寺に安置し玉う。不思議の靈驗今にありと云々。

この寺は天武天皇の御願、智恵僧正の建立なり。金剛山寺と曰う。是れ也。

上人、琰王宮にいたりし事は延暦十五年なり。」

① (都名所図会) 卷之一 平安城首―矢田山金剛寺の條より)。

「矢田山金剛寺は天性寺の南に隣る。浄土宗にして地蔵は満米上人の作なり。」

* 『矢田地蔵毎月日記絵』(写真版。「血盆地獄」、「業のはかり」の二葉。奈良博藏)、および『矢田地蔵縁起』(写真版。「地獄の鉄門」他、四葉。京都・矢田寺蔵。)を見ると、上掲の絵詞の如く、閻魔王・篋・満米・地蔵尊の四者の交渉を軸として、奈良の矢田寺の本尊地蔵尊像の由緒が描写されている。京都の矢田寺はその別院に相当するが、本尊地蔵は現物であるという。

本尊「地獄地蔵」は、一名を「那落化現一」(「地蔵大菩薩四十八體御詠歌」第二十八番―寺町三條上 矢田寺より)、また「代受苦」(京都・矢田寺本堂正面左側柱の銘より)ともよばれる。この本尊が地獄で苦しむ亡者にかわつて責めを受け、その姿をまのあたりにした満米が、現世にもどり生き写しの尊像を造顕したことに因む異名がそれらである。

③「六地藏」(別名、「廻り地藏」、「六地藏廻り」、「六地藏巡り」、「廻地藏」)

①「七道の辻ゴトニ六体の地藏菩薩ヲ造リ奉リ、卒都婆ノ上ニ道場ヲ溝テ大悲ノ尊像ヲ居奉リ、廻り地藏ト名テ七箇所ニ安置シテ」(「源平盛衰記」卷六―「西光卒都婆事」。傍線筆者。)

②「廻地藏は諸羽の東にあり。小野篁の作にして七道の辻のその一つなり。平清盛の命ありて西光法師の建立なり。」「(都名所図会)卷之三―左青竜―廻地藏の條より。)

③「乙子の地藏(杜の西にあり。六地藏巡りのその一なり。毎年、七月二十四日、地藏会あり。)」(同、卷之四―右白虎―乙子の地藏の條より。)

④「廻地藏(下桂にあり。華洛七道の一なり。毎歳、七月二十四日、群參す。)」(同、卷之四―右白虎―廻地藏の條より。)

⑤「廻地藏(実相寺の南、東側にあり。六地藏巡りの一なり。毎年、七月二十四日、群參す。)」(同、卷之四―右白虎―廻地藏(三二六頁)の條より。)

⑥「六地藏(指月の東八町ばかりにあり。このところのひがしは醍醐街道、西は伏見淀道、中に京街道あり。南は黄檗・宇治に至る。地藏堂(大善寺と号す。浄土宗なり。京道の角にあり。)

本尊地藏菩薩は、仁寿二年、小野篁、冥土に趣き生身の地藏尊を拝し、蘇りて後、一木をもって六体の地藏尊をきざみ当寺に安置す。

保元年中に平清盛、西光法師に命じて、都の入り口ごとに六角の堂をいとなみ、この尊像を配して安置す。いまの地藏巡り、これよりはじまる。」「(同、卷之五―前朱雀―六地藏の條より。)

⑦「御菩薩池は幡枝の南にありて、傍に地藏堂あり。平相国清盛の代、西光法師がいとなみしとぞ。六地藏廻りのその一なり。」「(同、卷之六―後玄武―御菩薩池の條より。)

*山科から醍醐を通り、宇治に抜ける往環上の地名の一つに「六地藏」がある。これは⑥の六地藏大善寺に由来する。

元来の「六地藏」は、①に示される「七道の辻」(三条大橋口、丹波口、長坂口、大原口、鞍馬口、東寺口、五條橋口の「京七口」)ごとに、後白河院の近臣の西光によって六角堂が造営されて、六体づつの地藏尊が安

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
西坂本	深泥池	蓮台野	西七条	造道	小幡の里	四宮河原	『盛衰記』地名	京七口	七街道名	現在の六地藏（『名所図会』）	地藏尊通称
(大原口)	(鞍馬口)	(長坂口)	(丹波口)	(東寺口)	(五条橋口)	(三条口)					
敦賀街道	鞍馬街道	丹波街道	西国街道	鳥羽街道	伏見街道	東海道					
右京区常盤馬塚町(源光寺 常盤地藏堂)	○北区上善寺門前町(上善寺) ×北区上賀茂狭間町←	×	西京区桂春日町(桂地藏堂)	南区上鳥羽岩ノ本町(浄善寺 地藏堂)	伏見区桃山町遠山(六地藏大善寺)	山科区四宮泉水町(徳林庵門前)					
常盤地藏・乙子	鞍馬口地藏・深泥池	×	桂地藏・廻・桂六	鳥羽地藏・廻	伏見六地藏・宇治廻	廻地藏・山科・四宮					

●次に新旧対称一覧表を示しておきたい。

置された事に由来している。あくまで、一ヶ所に六ヶ所であり、六ヶ所にまつられた地藏尊の総数が六体ではなかった。具体的には四宮河原、木幡の里、造道、西七条、蓮台野、みぞろ池、西坂本の七ヶ所である。

真鍋広済によれば、時代が下って寛永二十（一六四三）年に、事実小説の『福齋物語』に著名地藏としてあげられた13尊の中に、御菩薩池・山科六角・桂川島・常盤要・鳥羽の五尊が認められ、その二十二年後の寛文五（一六六五）年に京都伏見の大善寺住僧が著した『山城州宇治郡六地藏菩薩縁起』によって、新たに伏見を中心として山科四宮、上鳥羽、御菩薩池、桂の里、常盤院の六ヶ所を巡礼する「洛外六地藏参り」が再組織化されたと云う。また寛文八（一六六八）年に方誉向西が著した『山城國中浄家手鑑』には、毎年七月二十四日に御菩薩池からはじめて常盤の里に至る地藏参りが盛大に行われていた記事のある事が指摘されている（昭和三十五年、真鍋著『地藏菩薩の研究』—第三 民俗行事・章（2） 地藏巡礼と地藏盆—三密堂刊）。

④「子安」(『拾遺都名所図会』卷之三)後玄武・右白虎―日照山高山寺の條より。)

「初めは山岳横川に安置したまいしが、恵心入寂の後、志賀の里 木村成近尊信して、これを家に安置す。その後、逆乱に罹りて、この尊像を抱き北国さして落ち行きしが、ついに江州堅田の傍ら、田の中の平林に棄て置きけり。それよりこのところ、夜ごとに光明赫奕として白日のごとし。村人これを奇なりとして、尋ね見るに地藏尊を得たり。すなわち小堂を営みて田中の地藏尊と称す。その頃、文永年中、堅田の住人名村小太夫重俊夫婦、子のなきことを愁いてこの尊像に祈誓しければ、たちまち妊身になり、月満ちて男子を産めり。これより子安の尊像と号す。また暦応の頃、足利尊氏將軍御帰依ありて、洛の西、いまの地に遷仏仰せ附けられ、洛陽六体地藏巡りのその一尊となしたまう(第一壬生寺、第二三寺、第三連田野地藏尊、第四川崎清和院、第五祇陀林寺、第六鳥辺野宝積寺、この六ヶ所なり)。またその後、東山殿(義政公)も御信仰ありて、北の方、御平産の験あり。それより累年、この地に安置して靈応ますます隆んなり。」

*「子育て―」ともよばれるが、「子安―」は『縁起』にもある通り「子宝」、「安産」の靈験にも著るしいものがある。足利義政の妻女の(日野)富子が、尊氏が当地に遷座したこの地藏尊に鏡餅を供えて祈願した結果、授った男子が足利九代將軍義尚であると伝える。またこの地は、伝・空也作『西院河原地蔵和讃』の舞台であるとも云われ、一説には本尊の地藏尊は地藏盆の総本尊であるとされる。事実、明治三十三(一九〇〇)年の都市計画で、秀吉施工の「お土居」が大規模に掘削された際、大小多くの石の地藏尊がこの寺に移された。同三十五(一九〇二)年には、現在も本堂前に鎮坐する身の丈三メートル余の大地蔵石仏が黒谷山麓から遷座して、まさに全山地蔵尊一色の様相である。

⑤「鬘懸―」(一名、「山おくりの―」。『都名所図会』卷之二平安城 尾―普陀洛山六波羅蜜寺の條より。)

「北の方は地藏尊を安置す(いにしえは、この尊像を本尊として六波羅の地藏堂と号す。康頼の『宝物集』に曰く。「東山に貧しき女ありけり。年来この地藏尊を信じける。この女に年老いたる母を持ちたりける。ある時、老母死してけり。いかがして葬らんと案じ煩いいたりけるほどに、あるかた夕暮れ、行脚の僧一人出て来て、『何ごとにかくは歎きたまう』と問いければ、

事の子細をありのままにかたりける。僧これを「最易きことにこそ待るなれ」とて、ひしひしとしたため、背にかき負うて山えおくり、その営みしたまいけり。この女、嬉しさいうばかりなし。これは六波羅の地藏のんしたまえると思つて、参りて拜し奉りければ、地藏の御足に土打ちつけてぞおわしましける。それよりしてこの地藏をば山おくりの地藏とも、御手に老母の鬘を待ちていたまえば、かづらかけの地藏とも号しける。」

*この地藏尊の靈験の特色は、信者の難儀を見て、亡母の葬送一切を本尊の化身の僧が取り計ったところに顕著であろう。もつとも、その地が洛中より鳥辺野の無常所に至る際の入り口に当る点が注目される。

本尊の異名の一つ「山おくりの」の「山」は葬送地の鳥辺野などを示し、「おくり」とは葬送を代替した事に由来する。もう一方の「鬘懸」は遺族の信者の女が布施として僧に与えた黒髪が、地藏尊の左手にかかっていた故事に因んでいる。

◎まとめ

以上、京都各地に現存する異名をもつ地藏尊の内から、思いつくままに5例を取り上げ、その靈験譚を紹介した。その目的は、本尊に期待され、あるいは付与された利益・奇瑞・靈験の一端を知るためである。次に唐・実叉難陀訳『地藏菩薩本願功德経』（全二巻。大正蔵卷十三、四一一一番）・伝・不空訳『仏説延命地藏菩薩経』（全一卷。昭和十年版―永田文昌堂本・昭和五十一年版―大八木興文堂本・年次記載ナシ―其中堂本）所伝の利益を参照して、一覽に付しておく。

(番号)	(異名)	(異名由来)	(利益)	(願主他)
①	矢取 —	諸横消滅	諸横消滅	出現仏 —
②	地獄 —	先亡離苦	先亡離苦	満米上人御願
③	六地藏 —	—	—	伝・小野篁(西光法師)作
④	子安 —	有求皆従	有求皆従	伝・恵心僧都作
⑤	山送り	利益	先亡離苦 有求皆従	快賢御願・賢覚作

◎第二節 地藏尊をめぐる行事

ここでは前節に紹介した篁や満米上人ゆかりの「地獄」にまつわる「六道参り」をはじめとする一連の京の孟蘭盆会(①〜③)、および清和帝冊立伝説に由来する染殿妃ゆかりの「子宝・安産・子育て」(④)、そして慶俊によって奉祀された愛宕大権現の本地仏・勝軍地藏ゆかりの火伏せの「千日詣り」(⑤)をとりあげる。

① 「迎い鐘」〜「送り鐘」(孟蘭盆会の行事)

① 「迎い鐘」(東山区小松町・東山区松原通東大路西入ル北側・六道珍皇寺奉安。)

「建仁寺の南、松原通りにあり(六道と号す)。本尊薬師仏は伝教大師の作にして、開基は慶俊僧都、中興は弘法大師。篁堂には小野篁の像を安置す(このところより冥土え通いし道なりとぞ)。焰魔堂は東の方にあり。迎い鐘は、七月九日・十日、拝詣の人この鐘を撞いて聖霊を迎はしむるなり。六道の辻(本堂の前にあり)。当寺は久代平安城の葬所なり。桓武天皇、延暦十三年に長岡よりこの京うつらせたまうとき、このところを諸人の葬所に定めたまう由、『遷都記』に見えたり。また、ここを

愛宕ともいうなり。〔『都名所図会』巻之二—平安城 尾—珍皇寺の條、参照。〕

*京都の夏を彩る風物詩の一つに、毎年八月七日から十日の四日間、お盆に先立って、のべ十万人ともいわれる人出で賑いをみせる、「六道まいり」がある。普段は閑静なたたずまいのこの辺りも、この時期ばかりは、五条通（一名、「五条坂」。東大路通五条から五条大橋東詰めに至る一帯。）の陶器市の盛況振りと相いまって大変な活気を呈している。参詣の人々は、珍皇寺の参道で高野槇の枝の束を買ひ求め、同寺本堂で祖先等の戒名や俗名を水塔婆（経木塔婆）に書いてもらい、慶俊僧都ゆかりの伝承をもつ「迎い鐘」をつき、水塔婆を線香の煙りで浄め、地藏尊宝前で水回向（水手向）して帰路に着く。この一連の手続きを総称して「迎い鐘」をつく、あるいは「六道さんに参る」とよぶが、このあと自宅門前において「迎い火」を焚く。これによって祖霊が自宅へと帰環するのである。

*六道珍皇寺の所在地は、「六道の辻」（「死の六道」とよばれている。いずれも洛外に位置する京都の三大無常所（葬送の地）、すなわち東山の鳥辺野、洛北・船岡山南麓一帯の蓮台野、洛西・奥嵯峨・小倉山南麓周辺の化野の内、鳥辺野の洛中側からの入口に相当している。生者の世界と死者の世界が交わる地点、つまり「六道輪廻」のはじまる場所であると考えられ、「六道の辻」とよばれたものであろう。京都に限らず、各地の共同体の出入口、および葬送地の境界線上に「六地藏」がまつられることが多いのも、これと関連づけられるのではないだろうか？

*同寺の開創に深くかかわったとされる小野篁（参議・小野岑守の子息。延暦二十一（八〇二）年）は、平安初期に実在した高級官僚の一人であった。承和（八三四〜八三八）年間、淳和天皇派遣の遣唐副使に任ぜられたが、正使の藤原常嗣の横暴を風刺した漢詩を作ったため、嵯峨上皇によって隠岐に流刑に処されている。こ

の様な篁が、閻魔王宮の官吏を勤めたという話が、平安後期の説話物語集の『今昔物語』に収録されている。実際、篁は巡察弾正、彈正少忠、彈正少弼といった司法関係の役職を歴任して居る。上垣外憲一（『空海と靈界めぐり伝説』二〇〇四年、角川選書383）によれば、珍皇寺の所在する「六道の辻」が死者の輪廻を判定する場所である上、篁自身が司法官僚としての経験が豊富であり、また平安後期には恵心僧都の『往生要集（九八五年成立）』によって衝撃的な地獄描写が世間に広まった事などが重ねあわされ、そのイメージが成立したとされる。

ともあれ、伝説上の篁は、日中は宮中で務め、夜になると珍皇寺裏庭に現存する石組の古井戸から高野槇をつたわり冥界へと趣いて閻魔王に官吏として仕え、朝になると井戸から現世へと生環したとされる。珍皇寺の井戸が冥界への入口であるため、その地は「死の六道」とよばれ、一方、現世への出口にあたる井戸は化野の福生寺（廢寺。井戸も現存せず）につづいて居り、こちらは「生の六道」とよばれた。

*珍皇寺の「迎い鐘」には、鳥辺野という無常所への入口という立地条件、冥界と現世とを往来できた小野篁という存在、篁がつたわった高野槇というアイテム、冥界の閻魔王と本地の地藏菩薩が祀られるという条件など、いくつもの要素が重って、お盆における祖先や近親者の亡魂の各家への帰環をうながす行事として、人々が期待したことが認められる。

④「送り鐘」（寺町三条上ル東側。矢田山金剛寺本尊地藏尊宝前奉安）

*満慶（米）上人、小野篁の二人が閻魔王宮へと降り、地獄で亡者の苦を代替する生身の地藏尊に見え、現世に生環した際、巧匠に託して造顕したと伝わる矢田寺の「地獄地藏」の、宝前に奉懸された梵鐘の一名が、「送り鐘」である。

*盆の入りに先立ち、「六道参り」ろくどうまいで珍皇寺へ行つて「迎え鐘」をつき、角口で「迎え火」を焚いて祖先の亡魂の各々の自宅への帰環を促し、盆の期間中は御馳走を供養し、菩提寺から僧侶を招いて棚経をあげてもらい、盆あけの「送り火」以前に、今度は矢田寺に詣でて亡魂をお送りするために「送り鐘」をつく。各家の祖霊は、この鐘の音色を合図に、「五山の送り火」が灯されるとともにあの世へと旅立つのである。

②「地藏盆」（市街の辻々の小堂に祀られた石の地藏尊を本尊とする）

*真鍋広済（『地藏菩薩の研究』—第三民俗行事章—地藏巡礼と地藏盆より）は、黒川道祐作『日次記事』ひなみきじ（貞享二（一六八五）年成立）の七月二十四日の「洛下の児童は、おのおの香華を街衢の石地藏に供養してこれを祭る。」を引き、京都市内に石の地藏尊が多いのは、地藏尊信仰の篤かつた足利尊氏に由来するという説と、石地藏に香花を供える子供による地藏盆の風習が、京都発であることを指摘している。さらに、方誉向西作『山城国中浄家寺手鑑』の「小童群居して地藏祭りとして到すに、之由はある事は、鍊師の『釈書』に見えたり。今に至る迄七月には、花洛辺鄙ともに親は子に是を許し、群童には其所に是を行ぜしむる。是を地藏祭りといひ習わせる也。」（前掲書、P 47～P 48 参照）を引いて、「地藏盆」とは、毎月二十四日の地藏尊の縁日に「地藏講」が催されたり、「地藏祭り」が営まれていたことをうけて、孟蘭盆月（旧暦七月—関東。新暦八月—関西）の「地藏祭り」だけを、特に「孟蘭盆」に因んで「地藏盆」、また「地藏会」とよんだ事を指摘している。また、この風習は近畿地方に特有であるとも云う。

*現在では、八月二十三日、二十四日にかけて、町内の辻々に祀られた石地藏を水できれいに洗い清め、化粧をほどこし、真新しい頭巾や前掛けを着せかけ、沢山の菓子やくだものを供え、有縁の寺院の僧侶をよんで読経、念仏、和讃などをあげてもらう。ただし、あくまで子供たちが主体である点が特色である。

③「六地藏めぐり」(一名、「廻地藏」。第一節—③参照。)

「迎い鐘」を中心とした「六道参り」は、その立地条件が洛東地域における洛中洛外の天然の境外線であるところの鴨川をはさみ、西側が洛中、東側が洛外とすれば、まさに洛中側(西側)から境界線である鴨川を渡り、京都の東側の一大葬送地の鳥辺野(現在の清水道を北限、東大路通を西限、泉涌寺周辺までをふくむ広大な地域が南限、東限は五条から九条へかけての東山沿いの尾根辺りかと思われるが断定できない)への入口に相当している。このほか洛北には蓮台野(船岡山南麓一帯)、洛西では化野(奥嵯峨の小倉山南麓附近)を加え、京の三大無常所とよばれている。

鳥辺野入口の六波羅蜜寺・西福寺・珍皇寺の辺り、具体的には珍皇寺門前は「六道の辻」(一名、「死の六道」という地名をもっている。この地と、前述の蓮台野と化野には共通点がある。洛中と近接した洛外ギリギリの場所にある無常所である点、三ヶ所とも小野篁・大師にまつわる地藏尊と閻魔王を祀る点、そして篁の冥界往来に因む「六道の辻」にポツカリ口を開けた、あの世とこの世をつなぐ通路の出入口である伝説の井戸(蓮台野と化野は現存しない。)が存在した点、以上の三点がそれである。

●さて「六道の辻」とは別に、京都には「七道の辻」とよばれる地点が存在した(第一節③一覽表、参照)。それは洛中から洛外を抜けて諸国へ通じる七つの街道の出入口であった。その交通上の要路は、すでに見た『源平盛衰記』によれば、平安時代末期(保元二年)には成立していた事が分る。

京都では江戸時代以来、地藏菩薩の縁日の内、孟蘭盆会に隣接した八月二十四日(旧暦の七月二十四日)をはさんだ二日間、七ヶ所の辻である「七道の辻」を「六道の辻」に置き換え、六道、六ヶ所、六体地藏各一体の分置によって改変された六地藏を巡拝し、先亡の得脱、自らの後生菩提をはじめとする願いの成就を祈る。

これが「六地藏めぐり」であるが、京阪電車とタイアップして大々的に行われた時期（昭和三十年代頃）もあって、現在でも夏の風物詩の様につづけられている。

④「安産の腹帯」（染殿）（26）、「腹帯」（27）

*文徳天皇の后にして後の清和天皇（第四皇子・惟仁親王）の生母の（藤原）明子は、天皇の外戚（実母・順子は、明子の父の良房の実妹）にあたり、一名を「染殿の后」とよばれ、絶世の美女として名をのこしている。文徳天皇の即位当時、次代の皇位継承者最有力候補として有力豪族の紀氏の長者・名虎の息女・静子が産んだ第一皇子・惟喬親王がいて、両者は相撲や競馬で皇太子の座を争った。また、それぞれ有力な真言僧をよんで、勝負の帰結を密教修法の効験に求めている。

一説には、清和帝の側（藤原氏）は大師の実弟の真雅を招き、一方の惟喬側（紀氏）は、同族出身でこれもまた大師の高弟の一人の真済をよび立太子候補者の確定を祈願させたという。以上は真言側の伝承だが、もう一つの天台側にも同様の伝承がのこされている。

ただし、そこでは清和帝側の護持僧が真雅から天台の恵亮（大衆大師・宝幢和尚・寂光大師。信州水内郡出身。天長六年（八二九）、天台座主義真の門人。延秀の内弟子。民間の聖出身の験者。）にかわっていて、この人物と真済が修法の功力を競ったとされる。現に延暦寺西塔地区の「にない堂」（常行三昧堂と常坐三昧堂が渡廊で繋がった建造物）から西塔の本堂へと向う下り坂の途中、右側にその名も恵亮堂とよばれる堂宇が遺されている（元亀法難以後に再建）が、この堂宇は西塔の宝幢院（現在の妙法院門跡の前身）の由緒を今に伝える存在である。大師の高弟で異名を紀の僧正、あるいは柿本僧正ともよばれた真済の祈りも凄まじく、惟喬側の右兵衛督那都羅は惟仁側の善雄の少将を圧倒、今にも優勝しようかというその時、染殿皇后の急使をうけ

た清和帝側の惠亮は、何んと手にした独股杵で自らの脳天を打ち砕き、あふれ落ちる脳漿を護摩炉の中に投じつつ絶命したという。この文字通り捨身の修法により、大威徳明王の騎乗する青牛が大声に吼えること一度、その功力により清和帝側が逆転勝利を手中にしたと伝承する。村山修一によれば、「惠亮摧腦伝説」とよばれるこの説話は、『平家物語』の「後鳥羽天皇即位の段」をはじめとし、軍記物語の『曾我物語』に継承され、後世の狂言『横座』にまで登場するとされる（同氏著『皇族寺院変革史』平成十二年、塙書房刊・同『京都大仏御殿盛衰記』、平成十四年、法蔵館刊より）。

● いずれにせよ、後の清和帝の生母が日頃帰依して、その利益により帝を懐妊・出産、またお産が平安無事であった事などから、染殿皇后の名を冠した「染殿」が、そして後世、安産のための呪物として、本尊宝前にてねんごろに祈願された岩田帯にちなみ「腹帯」が、中ん就く帝の名をいただいた本宗の古刹・清和院の「川崎」などの本尊が崇敬されているのである。具体的には、皇位継承にあやかった子供の立身出世、また懐妊、および安産祈願のために信仰され、特に戌いぬの日には、安産のため例の腹帯を求める人が跡を断たない。

⑤ 「愛宕千日詣り」（32）他、参照。）

* 明治の神仏分離以来、神社神道色が強まったが、元来、葛城の鴨氏の出身の役小角や、大師の師匠の一人とされる三論宗の道慈律師の弟子の慶俊僧都（六道珍皇寺開基）によって漸次開かれたとされる洛西の愛宕山は、京洛周辺における山岳修験の一大拠点であった。現在の主祭神はカグツチの神や雷神であるとされるが、それ以前は愛宕山はぐえんじ白雲寺と称し、明治の神仏分離まで真言・天台の別当寺院がいなか瓦をつらね、中興開山の慶俊が奉祀したとされる本地仏の勝軍地藏の火伏せの功德によって名をはせてもいた。（「勝軍」は、大和国の子嶋寺の僧・延鎮が、坂上田村麿の東征に際し、清水寺、および鞍馬山に千手観音と毘沙門天を祀り戦勝を祈願した

折に感得されたという伝承（虎関師練撰『元亨釈書』巻九、他）をもつ。東密・台密ともに伝えるが、勝敵毘沙門と表裏の関係にあるともいわれる。）

●今日では、神仏分離という施策がもたらした結果として、本地・垂迹の觀念が埋没してしまい、勝軍地藏の縁日であるという認識自体は薄くなってしまうたものの、やはり「火伏せ」信仰の本来の意味を考えた場合、「愛宕の千日詣り」も神仏習合した地藏信仰の一つの典型と云うことが出来るであろう。日本における天狗の統領である愛宕の「太郎坊」のもたらす災禍の一つに大火災があり、これを一名、「太郎焼亡」とよんだと云う。同山の本地仏の勝軍地藏の功德によってこの災いが制圧されるという信仰がもととなって、今日まで続けられる「愛宕の千日詣り」が形成されたことが推察できる。

◎おわりに

以上、本稿では、京都という一地域に限定して、観音や不動と共に庶民の篤い信仰をかちえている地藏尊を例として、大乘仏教、さらには大師以来の真言密教、また比叡山の台密などで正統とされる同尊の位置付けとは別に、深く京都の民衆の生活にまで根をおろしたその在り様について、『雍州府志』や『都名所図会』などの地誌類の言及を主たる拠り所としつつ、また実際に自分の足でその舞台となった場所をたどりながら（平成二十一年七月～二十二年二月にかけて実施）、すでに紹介した異名をもつ多くの本尊の信仰の様子を確認してきた。

もちろん既述分は、冒頭に示した53例（実数44例）中、ある程度詳細なデータを集積しえた38例（1.）～（38.）の全てをカバーしたものでなく、わずかに29例の内から、いくつかを取り上げたに過ぎない。その意味で、更なる追加調査などが必要ではある。故に、今回はあくまで作業仮説的な中間報告にとどまる事を注意しておきたい。

さて、上述した様な作業の結果、次の様なことが指摘できるものと考ええる。

- ① 京都における地藏尊信仰は、市街地と隣接する郊外の無常所、あるいは市街地と外部との交通上の要路を結ぶ出入口に由来するものが多い（第一節①②③、第二節①②③参照）。
- ② その信仰は、必ずしも来世に関するものばかりでなく、「子宝」や「安産」など現世利益に類するものも少くない（第一節①、④など）。

③ 異名をもつ本尊の多くは、大師や小野篁、恵心僧都ゆかりの伝承を伝える（はじめに参照）。

④ それら本尊の多くは、日本撰述經典とされる伝不空訳の『仏説 延命地藏菩薩經』所伝の、いわゆる法羅陀山様、または延命地藏様とよばれる形態に準じて、錫杖と宝珠をもつ尊像が多い（はじめに）。

⑤ 後生菩提、あるいは離苦得楽型の伝承を有する地藏尊は、多くの場合、②で述べた無常所という立地条件（第一節②③⑤、第二節の①②③参照）、篁ゆかり（同前）の地藏尊と閻魔王尊像、および梵鐘、井戸などの存在、以上、少くとも三点の共通項をもっている。

*ここまでは、京都における地藏尊信仰のごく一端をかいまみてきたが、さて、果して「伝統」とは一体何時から「伝統」であったのだろうか？

例えば、遣唐使等によって、薬効顕著な新来の物産として請求された「茶」であるが、これが現代知られる「茶道」として確定したのは、桃山時代の堺の商人・千宗易（利休）らによる「わび茶」・「茶の湯」にはじまるというのが通説であろう。

実際は利休の直弟子たち、古田織部正ら「利休七哲」以後、孫の宗旦の子の江岑・仙叟・一翁より、はじめ「表」、「裏」、「武者小路」等の流儀がはじまった。以来、各流ともに十数代という「伝統」をほこるが、こ

の様に「茶」の世界にあっても、利休の新たななる「創造」から「伝統」の第一歩がはじまっている。

ある「創造」が、特定の地域・文化に定着し、数世代を経過した時、それが「伝統」であると思倣せるのではないだろうか？ その意味からすれば、「伝統」の「創造」とは、至言であると云って良いだろう。

今回紹介した、京都における「地藏尊信仰」という一事例をとってみても、やはり異文化の伝来という契機をさかいにして、地域の地理的、また風土的な要請などと相俟^{あは}って、新しい信仰が「創造」され、それが時代を経る中で、その地域に根ざした一つの「伝統」となった事が指摘できるであろう。

〈キーワード〉 伝統の創造 地藏菩薩